

入選

全て心の糧となる

徳島県 徳島文理小学校 六年

岡本 篤典

大好きだったそう祖母が他界して、6年がたつ。そんなにたったとは思えないほど、そう祖母の優しい笑顔やぬくもりを鮮明に覚えている。

そんなそう祖母の七回忌が先日、祖母の家であった。ぼくは、そう祖母のことを思い出し、さびしく悲しい気持ちだった。しかし、その日ぼくの気持ちを暗くしていたのは、それだけでなかった。

ぼくは学校でいやなことがあった。毎日毎日、いやがらせを受けて、大半は流していたが、自分の中でも消化できず、黒いかたまりになって心の底に重たくたまっていた。

自分に原因があるのかと考えもしたが、あまりに根も葉もない言いがかりで、解決もできなかった。

「こんなとき、そう祖母がいてくれたら、何とアドバイスしてくれただろう……。」

そう思うことも少なくなかった。

そんな中でむかえた七回忌。いつものように、お寺からご住職が来てくださり、お経をあげてくださった後、静かにぼくたちの方を向いて話をしてくださった。

ご住職は、一冊の本を見せてくださった。それは、日野原先生というお医者さんの本だった。日野原先生は、昔大病をわずらったとき、苦しくつらい中でも神様に感謝したというのだ。その経験は、ぼつでも試練でもなく、神様からのプレゼントだと。

ぼくは、どうしてかまったくわからなかったが、ご住職は優しい声でこう続けられた。日野原先生は元気になってから、お医者さんとして、より患者さんの気持ちがわかり、よりそえるようになった。それはなぜかという、本人が病気の苦しみ悲しみを経験しているからだ。

だからこの先、生きてると悲しいこと、つらいことが起きるかもしれないが、その全てが無駄ではない。必ず自分の糧となるのだ、と。

ぼくは、ご住職にぼくの心の中が全部透けて見えているのか、と思うほど驚いた。あまりに今のぼくの心境にぴったりのお話だった。

ぼくは、何でぼくばかりこんな辛い思いを、と思っていたが、ちがう。こういう経験をしたからこそ、言葉がどれくらい人を傷つけるかわかるし、人に優しく思いやりを持って接する大切さがわかったのだ。人の痛みがわかる人になれたんだ。ありがたいことなんだ。

そう思えて、心の底に残っていた重いものがずっと軽くなるのを感じた。

ご住職は、ぼくの背中を優しくポンとされ、

「がんばってくださいよ。」とおっしゃった。

その手のぬくもりが、まるでそう祖母のぬくもりのように感じた。苦しさから抜け出せないぼくを見るに見かねて、そう祖母がご住職にアドバイスをお願いしてくれたような、そんな気さえした。

小学校も今年で終わり、中学生になる。困難もたくさんあるだろうが、この言葉を胸にどんな時も前向きに乗り越えたいと強く思った。